

第11回「日学連アゴラ」の寄稿にあたり、この機会に自分の学生時代を振り返るとともに、主に地方で奮闘する学連やその加盟大学の皆さんに少しでもエールを送れたらと思い、僭越ながら学生卓球への思いを語ってみたいと思う。

私は2011年から学連に携わっており、途中1年ほど退いた期間もあって今年でちょうど10年目になる。思えば大学1年次の夏ごろ、ある先輩にほとんど説明されないまま半強制的に加入させられ、それが今では理事長を務めているとは、当時からすれば信じがたい話だ。当時の学連は同じ大学から集まった数名の学生のみで構成された、全国でも恐らく中国学連だけの体制で運営されていた。これでよく回るなあと思いながら、学連についてあまり深く考えず、先輩から依頼される仕事をなんとなくこなしていた。

そんな私の転機となったのは2年次のインカレ予選だ。幹事長が不在、副幹事長は途中参加という中で、年間で最も重要ともいえるインカレ予選の運営を担うことになった。自分の試合のことばかり考えていた私は、なかなか仕事に身が入らず、本来は学連がサポートするはずの主管大学の皆さんに頼りっぱなしで、学連役員として不甲斐ない姿を見せてしまった。

これではダメだと、一度冷静になって周りをよく見てみようと思った。いつも冷静で落ち着いた幹事長は、試合会場ではひたすら動き回って運営を行い、試合になれば一瞬で切り替えて懸命にプレーしていた。卓球部のメンバーに目を向けると、決して恵まれた環境とは言えない中で、全国を目指して必死に練習に励んでいた。そんな姿を目の当たりにし、「学連と卓球の両立は無理」とか「地方の大学では勝てない」と考えてしまっていた自分が情けなく感じた。

それから私の中で意識が大きく変わった。いまひとつ身が入っていなかった卓球も、学連と両立してやろうとがむしゃらになった。そうしているうちに私も幹事長になり、より責任感を求められるようになって苦しい時期もあった。そんな時でも周りにはいつも必死にプレーする選手たちがいた。同じ学生とはいえ、その逞しい姿に何度も励まされた。学連役員として、そんな選手たちをサポートしなければならないと考えるようになった。学連に携わっていたからこそ、自分の意識を変えることができ、非常に充実した学生時代を過ごすことができたといえる。

つい熱くなり長文になってしまったため、以降の話は次回？に持ち越しとしたい。しかしながらその機会は無いかもしれないため、この場を借りて、私を巧みに学連に勧誘した当時の先輩と10年にわたり学連の活動を支えて下さった全ての方々、そして学生卓球に感謝の意を表したい。

最後に今後について少々。目前に迫る2023年は、全日本学生選抜を中国学連の主管で開催することが決定したこともあり、激動の1年になると考えている。中国学連が主管の全国大会の開催はかなり久しく、少なくともこの10年では1度もなかった。それだけに不安も大きいですが、「地方学連でもやれる」と思ってもらえるよう、何としてもやり遂げたいものだ。そして何よりも、こんなに素晴らしい学生卓球の火を地方から消してしまってはならないと、そんな思いを胸に抱きながら、これからも学生卓球のために力を尽くしたいと思う。